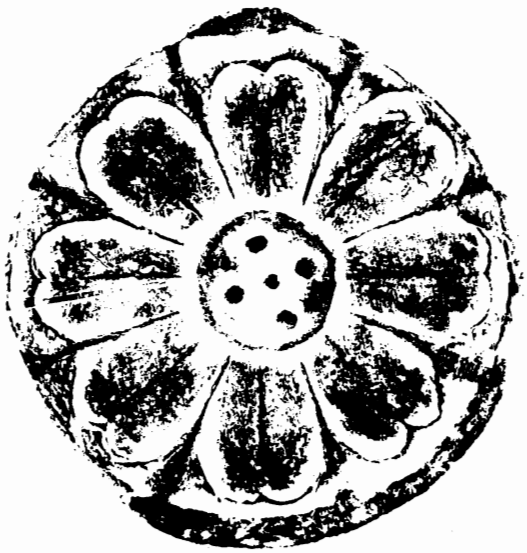
四條畷市埋蔵文化財包蔵地調査概報5

正法寺跡発掘調査概要・Ⅱ

――四條畷市大字清滝――



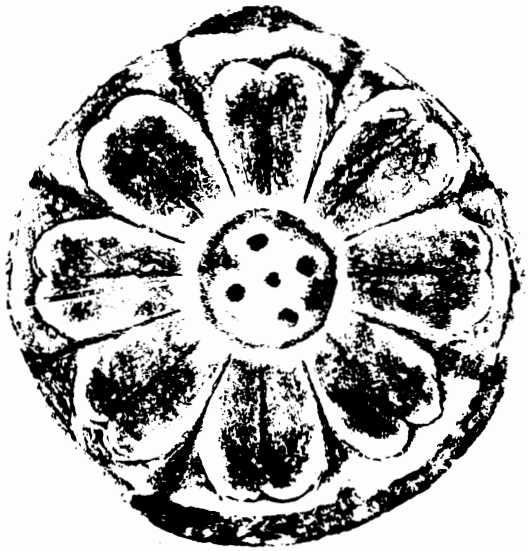
1978・3

四條畷市教育委員会

四條畷市埋蔵文化財包蔵地調査概報５

正法寺跡発掘調査概要・Ⅱ

――四條畷市大字清滝――



1978・3

四條畷市教育委員会

本　文　目　次

例　　言
第　1　章　遺跡の位置と環境 …… 1
第　2　章　調査に至る経過 …… 1
第　3　章　調査概要報告 …… 3
　　Ⅰ．正法寺跡 …… 4
　　Ⅱ．四條畷小学校内遺跡 …… 6
第　4　章　ま　と　め …… 10

挿　入　目　次

第1図　正法寺跡周辺地形遺跡分布図 …… 2
第2図　正法寺跡推定伽藍配置図 …… 3
第3図　トレンチ位置図 …… 4
第4図　第1トレンチ南壁・西壁断面図 …… 5
第5図　第2トレンチ南壁・西壁断面図 …… 5
第6図　トレンチ位置図 …… 6
第7図　東地区西壁断面図 …… 7
第8図　東地区南壁断面図 …… 7
第9図　ＮＳ－Ⅱ　東地区出土遺物 …… 8
第10図　ＮＳ－Ⅱ　東地区出土軒丸瓦 …… 10
第11図　正法寺字切図 …… 11

例　　言

1．本書は、四條畷市教育委員会が、昭和52年度国庫補助金事業（総額1,000,000円、補助率 —— 国50%、府25%）の交付を受けて担当実施した四條畷市清滝所在正法寺跡発掘調査事業の第２次の概要報告書である。

2．調査は、昭和53年２月１日に着手し、昭和53年３月31日に終了した。

3．発掘調査は、教育委員会社会教育課技師　野島　稔を担当者とし、補助員として、花田照也、森本澄一、立岡伸也、田中栄一があたった。

出土遺物の整理、実測などについては、野島　稔、花田照也、永井蓉子、阪本冨美子、木本倫江、川本三智子、平山純子、片岡純子があたった。

4．本書の執筆は、野島　稔が行なった。

5．発掘調査の進行、報告書作成などについては、大阪府教育委員会、堀江門也主査、大阪経済法科大学　瀬川芳則氏から種々の御教示をうけた。なお、調査の実施にあたっては土地所有者、小倉昇三氏には、終始懇切なご協力をうけることができた。記して厚く感謝の意を表する。

正法寺跡発掘調査概要・Ⅱ

第1章　遺跡の位置と環境

正法寺跡は、大阪府四條畷市大字清滝３８５番地外２０筆にあり、南北に通じる府道枚方富田林・泉佐野線（東高野街道）と東西に横切る清滝街道が交叉する地点から清滝街道を東へ約100ｍ登った、標高約30ｍ（T·P）の洪積層の丘陵上に立地する。

この丘陵は、清滝丘陵と呼ばれ現在は約２町四方が水田地に化し保存されている。そのレベルは一様でなく四、五段の高低差が認められる。

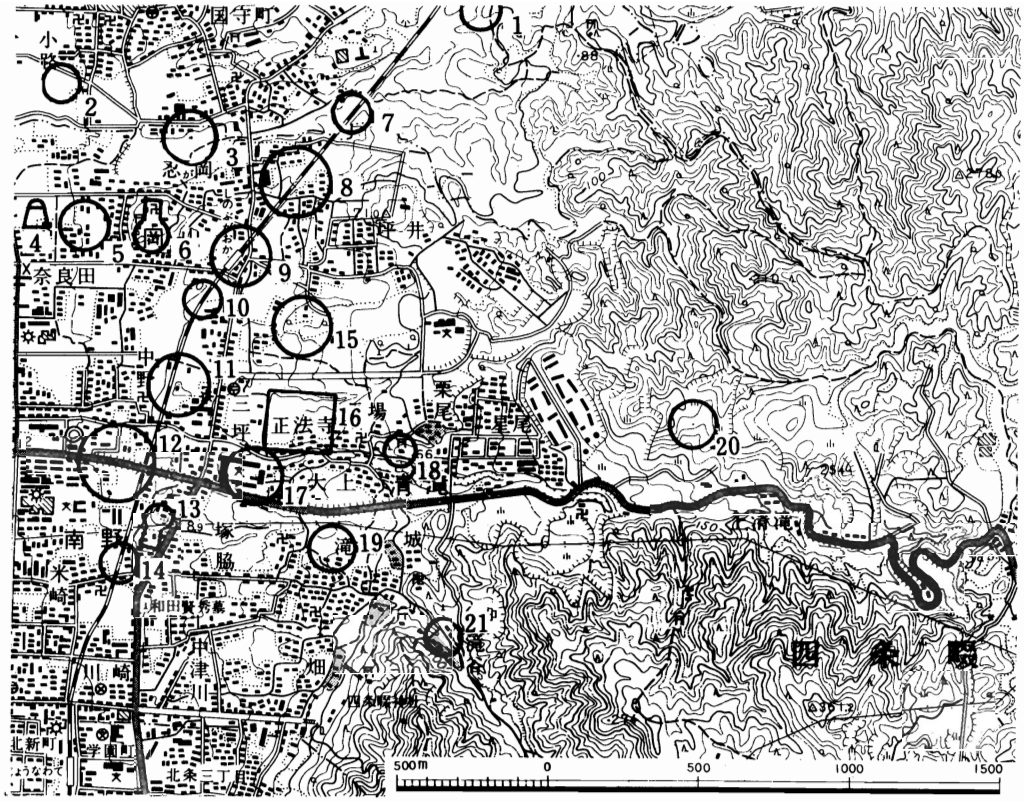
寺跡の調査は、過去に幾度か実施されている。その都度かなり重要な遺構・遺物が検出され保存されている。

東の生駒山系から流れる水は、讃良川・清滝川・権現川となり、いずれもこの丘陵を横切りつつ東西に谷地形を形成している。なお、これらの谷によって付近の丘陵は北から忍ケ岡丘陵・清滝丘陵・南野丘陵に分けることができる。

正法寺跡の所在する清滝丘陵には、現在のところ古墳時代中期の集落跡の奈良井遺跡・中野遺跡、四條畷小学校内遺跡、鎌倉時代の国中遺跡等が知られているほか、古墳時代以降の遺跡も近時多数発見されている。そのほか付近では、南野丘陵では、古墳時代の集落跡の南野遺跡、木間遺跡、古墳時代中期の前方後円墳と考えられている墓の堂古墳、白鳳時代の龍尾寺跡があり、また、忍ケ岡丘陵には、忍ケ丘駅北西約200ｍの讃良川々畔に、旧石器時代と縄文時代後・晩期・白鳳時代寺跡が複合する讃良川遺跡・讃良寺跡がある。又、忍ケ岡丘陵の先端部に建つ式内社忍陵神社拝殿横には、古墳時代前期の忍ケ岡古墳などが早くから知られていたが最近の調査によって坪井遺跡、忍ケ丘駅前遺跡、南山下遺跡等の新発見遺跡が増えている。なお、忍ケ丘駅より東方約100ｍに古墳時代中期の集落跡が発見され遺構内より円筒埴輪・切妻造家形埴輪・動物埴輪等とともに多量の土器・木器を出土した岡山南遺跡がある。

第2章　調査に至る経過

遺跡は、四條畷市清滝に所在する。昭和44年以降幾度となく発掘調査を実施され、大きな



第1図　正法寺跡周辺地形遺跡分布図

1．打上遺跡
2．小路遺跡
3．讃良川遺跡・讃良寺跡
4．四條畷銅鐸出土地
5．北口遺跡
6．忍ケ岡古墳
7．国守遺跡
8．坪井遺跡
9．忍ケ丘駅前遺跡
10．南山下遺跡
11．奈良井遺跡
12．中野遺跡
13．墓の堂古墳
14．南野遺跡
15．岡山南遺跡
16．正法寺跡
17．四條畷小学校内遺跡
18．国中遺跡
19．木間遺跡
20．千畳敷遺跡
21．龍尾寺跡

成果をあげてきている。

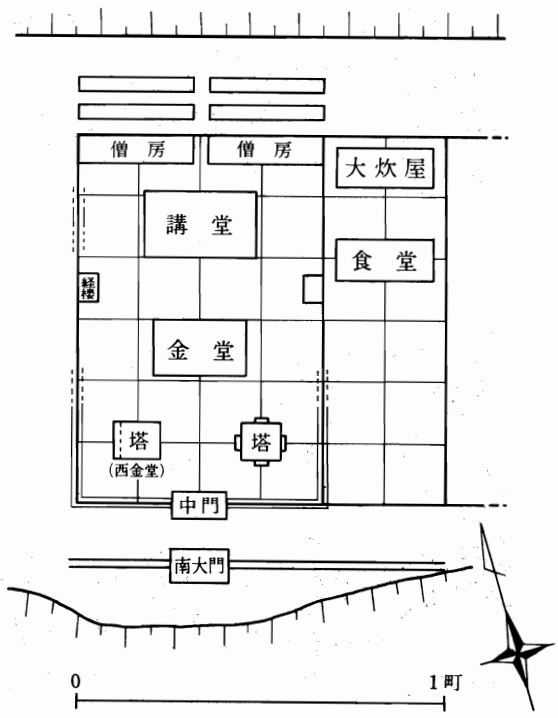
昭和44年度に大阪府教育委員会が府道枚方・富田林・泉佐野線新設バイパス予定地内を事前に発掘調査を行った。その結果、石積基壇・土塀・大溝・井戸などの遺構が検出され、各遺構内から奈良時代前期～室町時代にかけての瓦や土器の出土が報告されている。これらの遺構、遺物から正法寺跡の寺域あるいは、伽藍配置を図で示されている。

昭和51年度には、四條畷市教育委員会が範囲確認調査を実施した。東西約108m(360尺)、南北約145m(483尺)の範囲に広がる奈良時代前期の寺院跡であることが裏付された。その

調査の結果、幅3mの西側築地跡遺構が検出し、奈良時代前期～平安時代の厖大な軒丸瓦、軒平瓦、平瓦などが発見された。又、金堂跡と推定される場所では、鎌倉時代の井戸遺構1基を検出した。その井戸内から同一時期に比定される平瓦が数点出土している。

このように、正法寺跡の寺域の中心伽藍と推定されているところについては比較的良好な保存状態であることが明らかになった。しかしながら、寺域東限については遺物だけであり、確実な遺構等の検出は明らかにされておらず寺域東限をもう一層明確にする必要が生じてきた。このため四條畷市教育委員会では、昭和51年度に引き続いて52年度も国庫及び府費による埋蔵文化財包蔵地調査補助金の交付を受けて調査を実施することになった。

今回の調査は、四條畷市教育委員会が担当実施し、四條畷市大字清滝401番地(小倉昇三氏所有地) について昭和53年2月1日から昭和53年3月31日まで実施した。



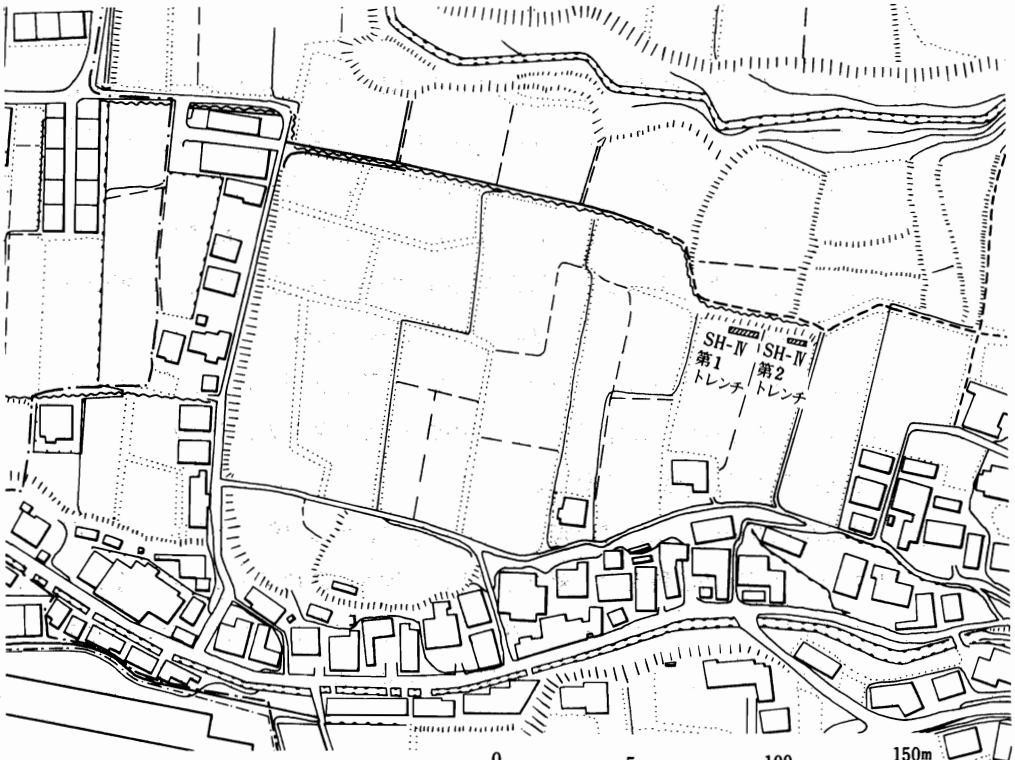
第2図　正法寺跡推定伽藍配置図

第3章　調査概要報告

今回の調査は、国庫補助金事業に伴う発掘調査のため範囲確認を目的として調査を行なったものである。現在調査可能な場所は、水田・畑で休耕時に調査の実施につとめた。

今回の調査設定場所は、昭和51年度の国庫補助金事業の発掘調査の際、ボーリング調査を実施し、平安時代の平瓦、土師器片を出土した畑地で、地籍図にも字正法寺と記録されている最東端の場所でもある。この畑地が正法寺跡の寺域東限と考えられており、遺構の確認を行なう目的で実施したものである。

又、昭和51年に四條畷市教育委員会が実施した、四條畷市立四條畷小学校屋内体育館建設に伴う事前発掘調査の際、正法寺跡出土の蓮花文軒丸瓦と同范瓦が1点出土しており、同時期に比定される多量の平瓦、土器類が検出された。ここに参考として遺構の概要を詳しく説明を加えておきたい。



第3図　トレンチ位置図

Ⅰ　正法寺跡（SH-Ⅳ）

四條畷市大字清滝401～402番地にかけての地は、田圃に「正法寺」という呼び名が残こっている東端に位置している。

この畑地に東西7.30m、南北1.20mの第1トレンチ、その東側に東西4.50m、南北0.8mの第2トレンチをそれぞれ設定した。

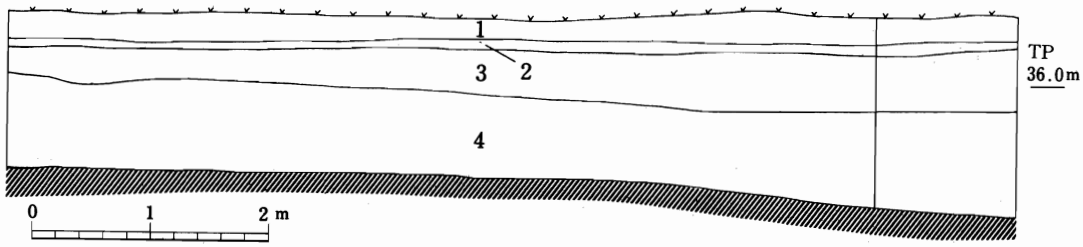
1．SH－Ⅳ第1トレンチ（第4図）

四條畷市大字清滝400番地の畑地に第1トレンチを設定した。

畑地面高T・P 36.50mで、周囲の田圃より一段大きく段をなしており、この畑地の南側小道路は馬場――堂庭線と呼ばれている。正法寺跡の寺域東限の可能性が十分考えられる場所であった。

調査方法は、耕土を別に取り除き調査終了後の埋め戻しが可能な状態としておいたのち、床土以下順次掘り下げ作業を行なった。

その結果、第3層褐色砂質土で厚さ約30～50cm、第4層暗褐色砂質土で、厚さ約80～90cmの層位を検出した。すなわち、耕土下約1.70mで地山に達する。この地山は、生駒山系の主



第4図　第1トレンチ南壁・西壁断面図

1．耕土
2．床土
3．褐色砂質土
4．暗褐色砂質土

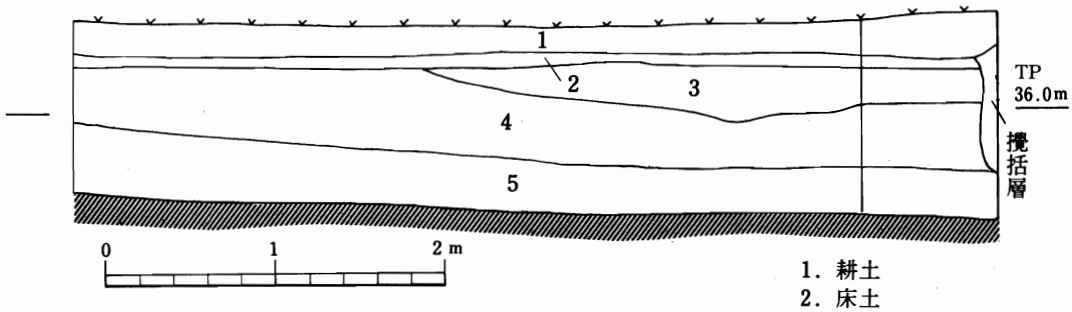
体をなす花崗岩質であった。出土遺物は、第1層より須恵器片・土師器片、第3層以下から瓦片・土師器片等が出土しており、出土遺物からみて平安時代から鎌倉時代にあてることができる。しかし、第1層から出土した須恵器片は古墳時代後期の甕の破片であった。

調査地の北側の水田、大字清滝362－2番地は「双子塚」の字名が残っており、以前古墳時代後期の家形石棺が出土した事が知られている。今もなお石棺蓋は寺跡東方の式内社国中神社入口に置かれている。又、調査中清滝346番地から円筒埴輪片を検出することができた。これら古墳時代の遺物から推察して、正法寺跡東側に古墳時代後期の古墳が正法寺跡の遺構に重複するとも考えられ、今後の調査に残された問題点であろう。

2．SH－Ⅳ第2トレンチ（第5図）

SH－Ⅳ－第1トレンチの東側、大字清滝402番地に第2トレンチを設定した。畑地の東北隅で 0.8m幅で東南に長く設定した。調査は第1トレンチ同様、耕土を掘り下げた後、第2層床土以下順次掘り下げた。その結果、第3層暗茶褐色砂質土で厚さ約20cmがブロック状に入り、第4層褐色砂質土で厚さ約30cm、第5層茶褐色砂層で厚さ約40cmで地山に達した。

地山は東から西へ深さ約10～20cmでなだらかに傾斜をするものでこれだけでは遺構とは考えられない。第3層以下から土師器片が若干出土している。



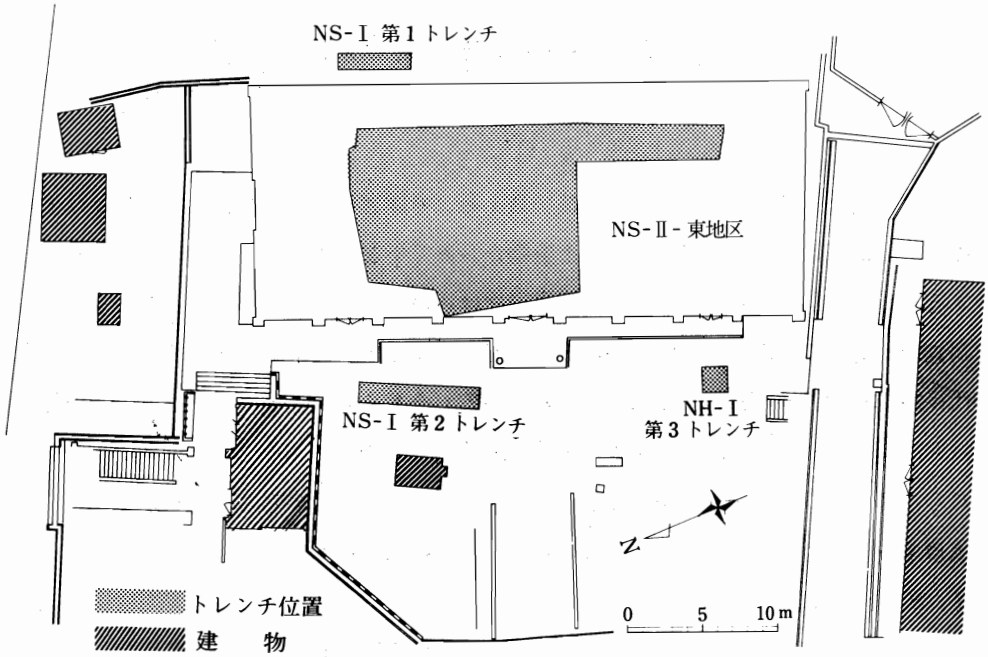
第5図　第2トレンチ南壁・西壁断面図

1．耕土
2．床土
3．暗茶褐色砂質土
4．褐色砂質土
5．茶褐色砂層

Ⅱ．四條畷小学校内遺跡（NS－Ⅰ～Ⅱ）

清滝丘陵の先端部でゆるやかな南斜面には、従来数段の田畑が耕作されている。これらの田畑の高低差は約２ｍで、水田面高T・P27.5m 前後を基盤となっている。

調査地区は、清滝と中野の境界に位置する中野873～875番地に設定した。この設定場所には、地籍上「井戸ノ内」の字名が残されている。



第6図　トレンチ位置図

以前、小学校北西隅のプール敷地内より漢式土器が出土し、遺跡の存在が明らかにされた。又、清滝452，453，525，527番地の田圃一帯には、土師器・須恵器・布目瓦等の土器片が多数表面採集されている。これらの採集された土器からみて、古墳時代～奈良、平安時代に至る複合遺跡と考えられる。今回の調査地は、これらの遺跡の中心部にあたる講堂改築予定地などに計4ケ所のトレンチを設定した。

１．ＮＳ－Ⅰ第１トレンチ

講堂東側の空地に設定した。調査はまず、空地に5×1mのトレンチを設定し掘り下げを開始した。第１層表土、第２層旧耕土を取り除き掘り下げたところ地表下約60cmで東西に走る溝状遺構を検出した。溝は幅90cm、深さ45cmであり、その遺構内より瓦器埦、土師皿、ねり鉢片などを発見した。出土遺物の形式からこの溝状遺構は鎌倉時代末期以降に比定するものと考えられる。

２．ＮＳ－Ⅰ第２，第３トレンチ

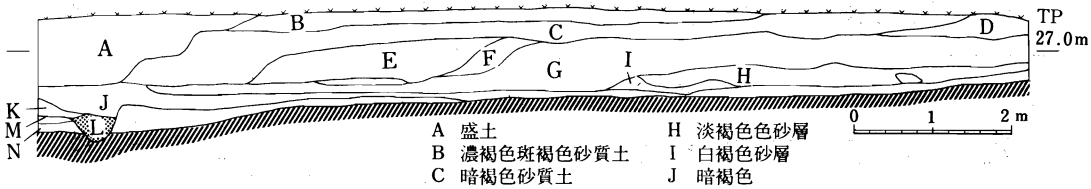
講堂西側に8×1.3mの第2トレンチ、1.7×1.7mの第3トレンチをそれぞれ設定した。第2トレンチは、第1層盛土、第2層褐色砂質土で、厚さ約20cmで地山に達した。第2層からの出土遺物として土師器片が若干出土しているのみで遺構の検出はできなかった。

第3トレンチでは、第1層盛土、第2層旧耕土、第3層床土、第4層褐色砂質土で厚さ約20cm、第5層暗茶褐色砂質土で厚さ約40cmの層位を検出した。第4層～第5層から、須恵器、土師器の土器片が多数出土している。

3．NS－Ⅱ－東地区（第7，8図）

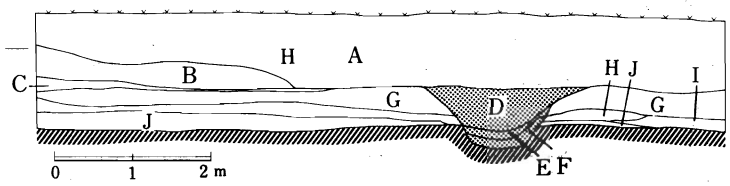
これらの第1～第3トレンチの調査にもとづき講堂撤去後中心部に東地区の本格調査を実施した。

東地区中央部で表土下約1.2mで東西に走る溝状遺構を検出した。溝幅70cm、深さ35cmで



A 盛土
B 濃褐色斑褐色砂質土
C 暗褐色砂質土
D 淡茶褐色砂質土
E 暗褐色小礫混り層
F 暗褐色砂層
G 淡褐色砂質土
H 淡褐色色砂層
I 白褐色砂層
J 暗褐色
K 茶褐色砂質土
L 暗褐色粘質土
M 白褐色粘質土
N 淡茶褐色砂質土

第7図　東地区西壁断面図



A 盛土
B 旧耕土
C 床土
D 濃茶褐色砂質土
E 灰黒色粘土
F 青灰色砂質土
G 茶褐色砂質土
H 暗褐色砂質土
I 暗灰色粘質土
J 淡茶褐色砂質土

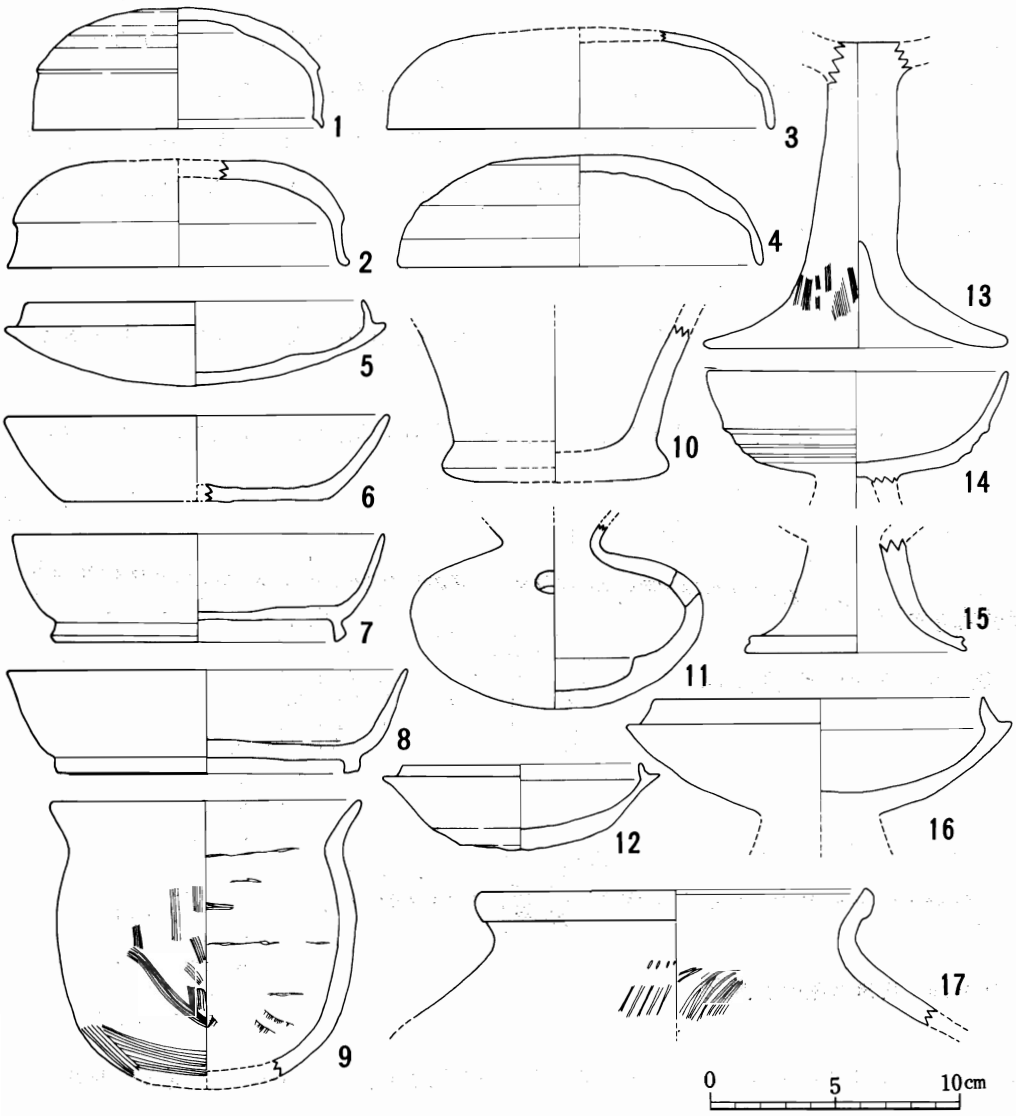
第8図　東地区南壁断面図

淡茶褐色砂質土をベースにしている。又、西側でも幅2m、深さ75cmの溝状遺構を検出した。溝状遺構最下層に平瓦1点出土しており、鎌倉時代末期以降の平瓦であった。この遺構のベースに使われている茶褐色砂質土層から高台付坏身が出土し、又、最下層の淡茶褐色砂質土から古墳時代の土師器高坏、甕、須恵器坏身、坏蓋が出土している。地山は、北から西へ深さ約60cmでなだらかに傾斜するものでこれだけでは古墳時代の遺構とは考えられなかった。

NS－Ⅱ東地区の出土遺物は、暗褐色砂質土と淡茶褐色砂質土中から出土している。

出土遺物としては、須恵器坏身、坏蓋、高坏、甕、鉢、土師器甕、高坏等である。

(1)～(4)は須恵器坏蓋で淡茶褐色砂質土中から出土したものである。(1)は口径11.5cm、稜径11.3cm、器高4.7cmで口縁部は垂直に下り、端部で短く外反して端部は内傾する凹面を有する。天井部は丸く口縁部との境に断面三角形の稜をなす。(2)は口径13.4cm、器高4.2cmで口



第９図　NS-Ⅱ 東地区出土遺物

縁部は下外方に下り、端部付近で外反し端部に至る。端部は丸く天井部は比較的平らである。(3)は口径15.2㎝、器高4.0㎝で口縁部はやや内傾気味に下外方へ開き、中位で一段ゆるく屈曲して端部に至る。(4)は口径14.3㎝、器高4.3㎝で口縁部は短く垂直に下り端部に至る。端部は丸く、天井部は浅く平らである。

これらの手法の特徴としては、マキアゲ、ミズビキ成形であり、天井部の¾を回転ヘラ削りで他は回転ナデ調整を施している。焼成は良好で、胎土は密である。色調は、内・外面とも青灰色を呈している。

(5)～(8)．(12)は、須恵器坏身で(5)は口径13.3㎝、受部径15.1㎝、器高3.3㎝で、たちあがりは内傾しながら上方に立ち上り、端部は丸い。受部は水平に近く、外方向にのびている。底部は浅く平底に近い丸底である。(12)は口径9.4㎝、受部径11.0㎝、器高3.3㎝で小形の坏身である。たちあがりはやや内傾気味で端部は丸く器壁は厚い。受部は水平に短くのびて端部は丸くとじる。底部は浅い丸底で外反して立ち上り、ややふくらんだ後、なだらかに屈曲して受部をつくる。(6)は口径15.1㎝、器高3.4㎝で口縁部は外反したのち端部に至る。端部は丸く、体部は平底より短く外反して立ち上ったのち外弯し、口縁部へ続く。(7)は口径14.7㎝、器高4.3㎝、高台径11.7㎝、高台高0.8㎝で口縁部はわずかに外弯したのち端部へ至る。端部は丸く、体部は平底の底部より丸く内弯して立ち上り、更に外反して口縁部へ続く。底部はほぼ平らであり底部より端部が外傾する面を呈した高台を有している。(8)は口径15.8㎝器高4.1㎝、高台径12.0㎝、高台高0.7㎝で口縁部体部は(7)と似ており、底部と体部の境にやや外傾する面を呈した高台を有している。(7),(8)は高台を有し、高台はハリツケである。内・外面は回転ナデ調整を施している。仕上げは非常に丁寧である。

(9)は土師器甕で口径12.1㎝、胴径11.9㎝、器高11.4㎝、口縁部高2.4㎝、胴部高9.0㎝で口縁部は単純に外上方へのびて端部は肥厚する。内面は刷毛目の上をナデ調整を施し、外面は不整方向の刷毛目が残る。胴部は肩を張らず垂下し底部で丸くなる。粘土紐接合の段をもつ。

(10)は須恵質鉢で残器高6.0㎝、底径8.8㎝で口縁部は欠損のため不明、体部は外傾し上方にのび、口縁部に至る。底部は基部より水平に張り出し内傾する。手法の特徴として、マキアゲ、ミズビキ成形であり底部はハリツケである。

(11)は瓶で残器高7.2㎝、口頸基部径3.0㎝、肩部は口頸基部より内弯ぎみに外下方に下り丸底を形成する。肩部に円孔（たて1.4㎝、よこ1.3㎝直径）が内傾して外→内へ穿たれている。肩部は回転ナデ調整、体部は回転ヘラ削り調整、底部は不整方向へのヘラ削り調整を施している。体部内面にマキアゲ痕が残る。

(13)は土師器高坏脚部で裾部径12.0㎝、器高12.0㎝で内面は脚柱部がしぼり十ヘラ削り、裾部が刷毛目で調整する。脚部上面は坏部内面としてナデ調整が施されている。胎土に0.1㎝前後の砂粒を含む、器表面は平滑であり全体に赤褐色を呈している。

(14)は須恵器の無蓋高坏で口径11.8㎝、残器高4.2㎝で坏部のみ残存している。底部はやや平底で外反して立ち上る。マキアゲ、ミズビキ成形で脚部はハリツケである。ハリツケ以前に坏部底面に回転ヘラ削りを施している。

(15)は須恵器高坏（脚部）で脚部径8.8㎝、脚部高4.2㎝で脚部基部はやや太く、一端内傾して下った後、大きく外下方へ開く。端部近くで水平にのびた後、屈曲して外弯する段を成

す。脚部には台形の透しを三方に穿う。

⑯は須恵器の有蓋高坏で口径13.0cm、残器高4.5cm、受部径15.3cmで坏部たちあがりは内傾し更に角度を変えて内傾して立ち上り、端部はやや鋭い受部で水平に短くのびる。底部は浅く平底に近く内弯ぎみに外上方にのび受部に至る。

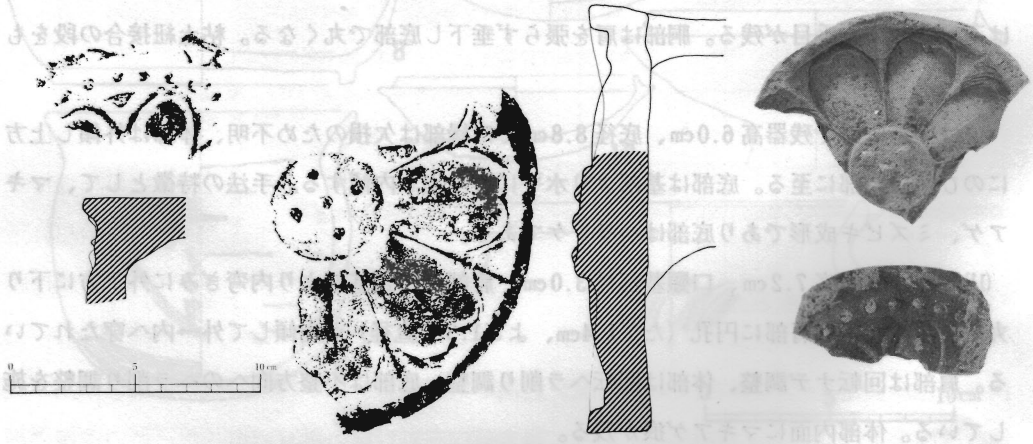
⑰は須恵器の甕で口径15.2cm、残器高5.1cmで口頸基部より弯曲して外反し段を成す。口縁部は、弧を描いて弯曲し端部付近で更に内傾する、口縁端部は丸い。肩部は口頸基部より外下方に張り出す。

軒丸瓦

東地区から正法寺跡出土に係る第1類、第2類の軒丸瓦各1点が淡茶褐色砂質土から出土している。

第1類は直径18.0cm、厚2.5cm、中房径4.3cm、弁数単弁8葉、中房蓮子1＋4、色調は赤褐色、第2類は直径不明、厚2.0cm、弁数単弁9葉、外区内縁に珠文があり、外縁に鋸歯文が施されている。

第1類の軒丸瓦が正法寺創建時の軒丸瓦である。



第10図　NS-Ⅱ 東地区出土軒丸瓦

第4章　ま　と　め

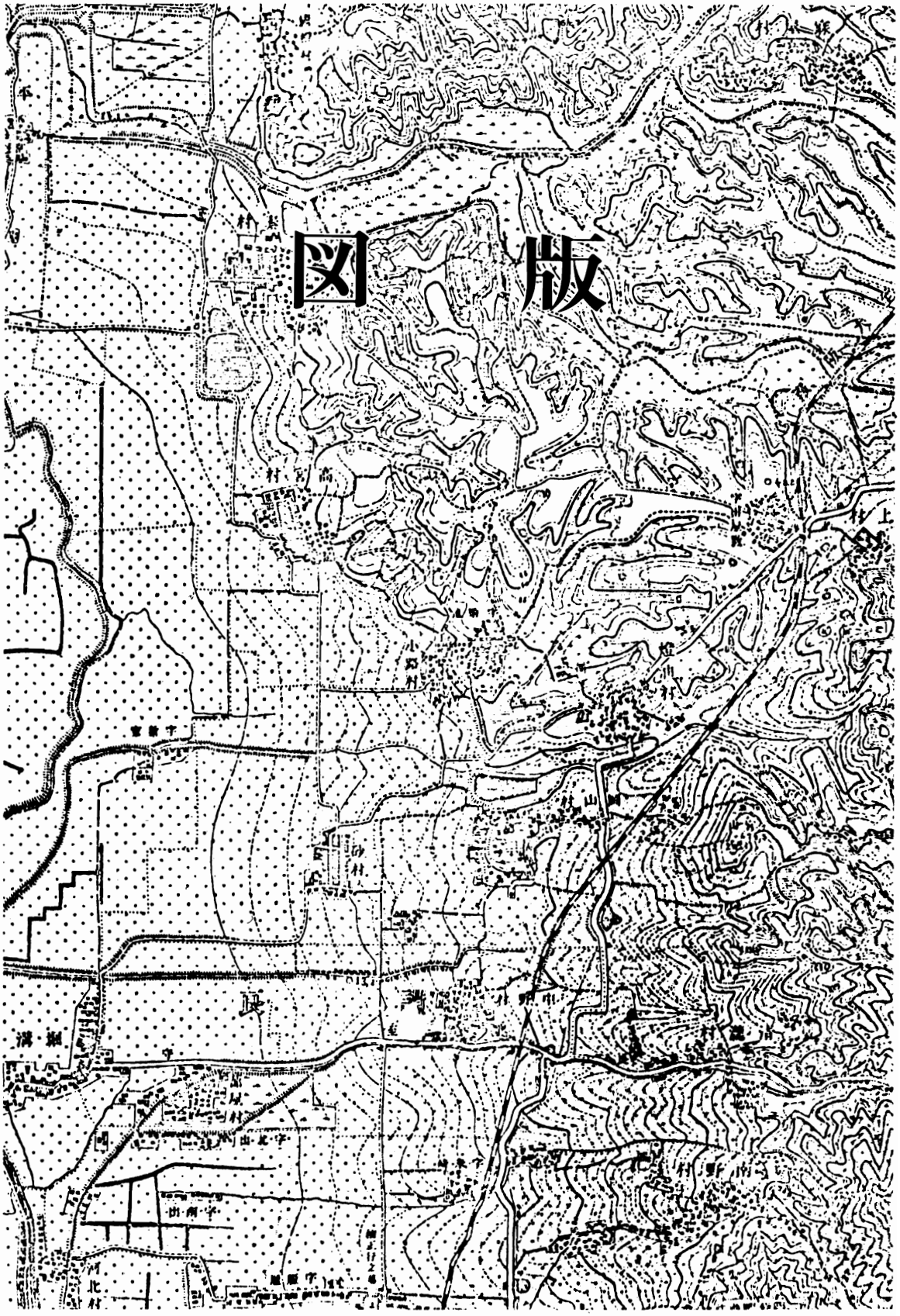
今回の発掘調査は、正法寺跡の寺域東限の遺構の確認を行ない、今後の保存対策を講じる必要から実施したものである。

推定正法寺跡の範囲は現在水田、畑などを利用されているため、調査範囲内に多くの制限があったが二ケ所のトレンチを設定することができた。

第11図　正法寺字切図

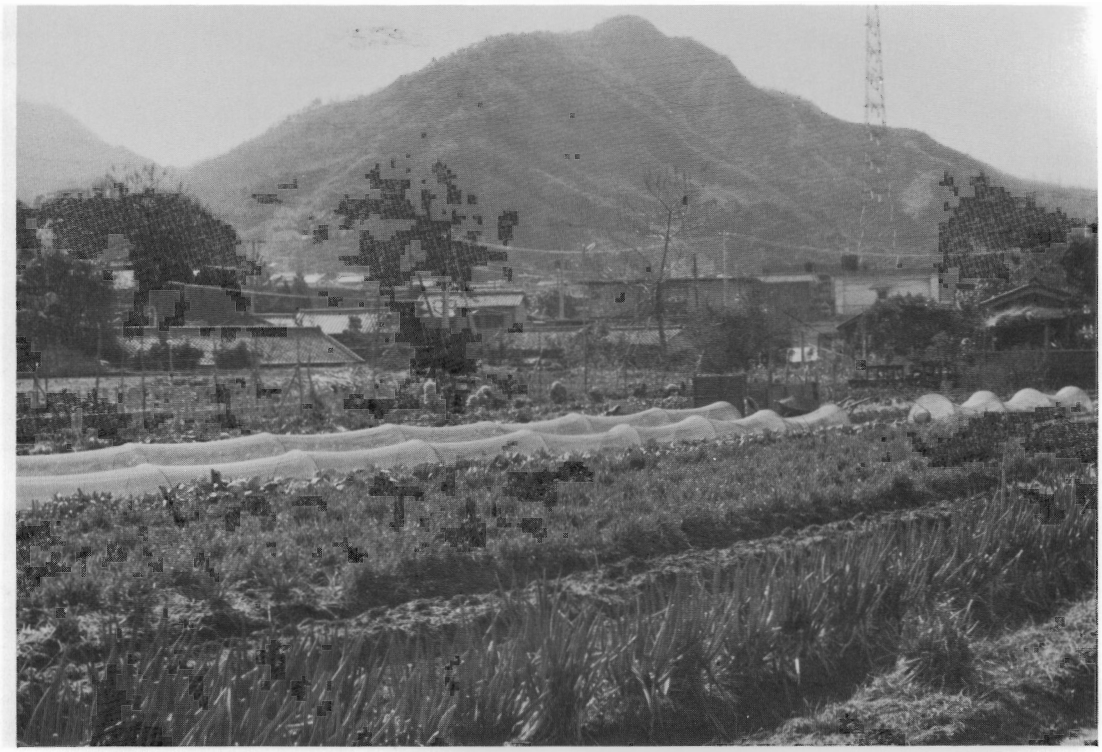
その結果、今回の調査では、正法寺跡に関する遺構は何ら検出できなかった。ただ、第1トレンチより平安時代に比定される若干の土器が検出されていることから、今後の調査によりこの時期の遺構が発見される可能性が残されている。また、正法寺跡の遺構は、昭和51年度の国庫補助金事業に伴う発掘調査により、奈良時代に属する軒丸瓦、軒平瓦、土器類が西側の築地遺構から多量に出土している。又、金堂跡と推定されている場所から鎌倉時代の石積みの井戸遺構及び、同時期に比定される若干の瓦、土器が検出されている。また昭和51年の四條畷小学校敷地内の発掘調査により、古墳時代の土器や奈良時代の瓦類が混入して多量に出土していることから、この一帯の今後の調査に残された問題点であろう。

正法寺跡の範囲は、現在までのところ水田、畑で完全に保存されており、字名でひろっていくと、現在の木村喜市氏の清滝３８５番地の水田を中心にした地域で、北は岡部川に囲まれたところまで、南は清滝川に至る地域が想定できる。



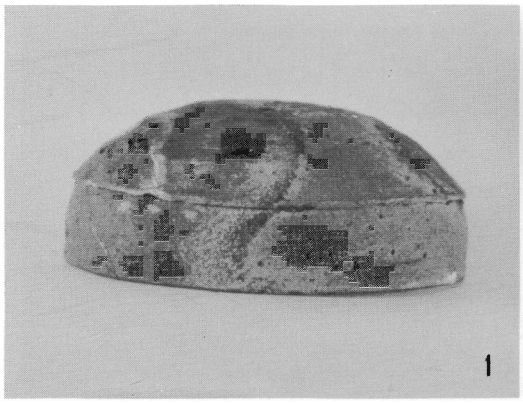
図版

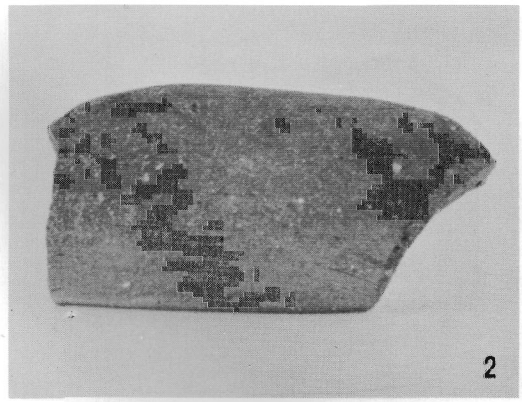
図版1　航空写真

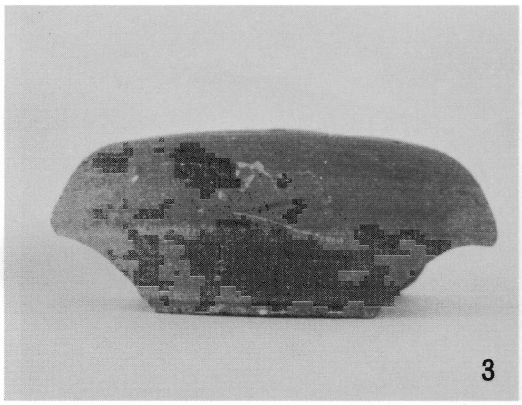


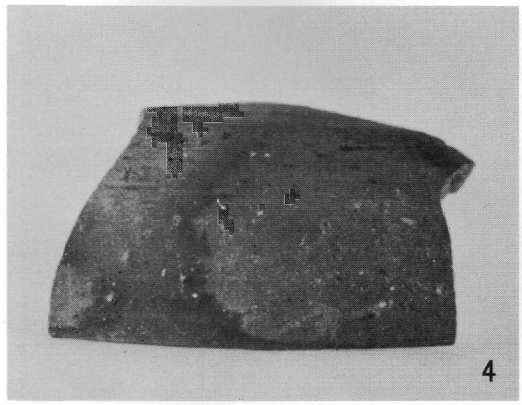
図版2　正法寺跡全景写真

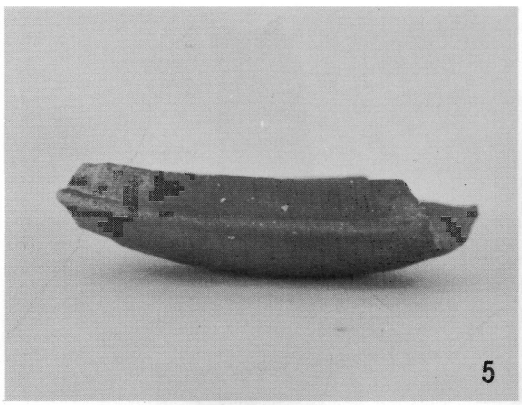
図版4　四條畷小学校内遺跡

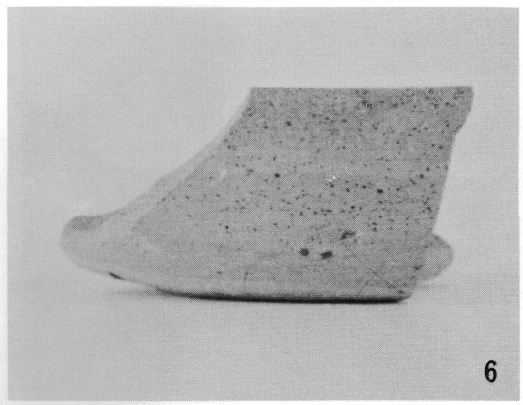

1


2


3

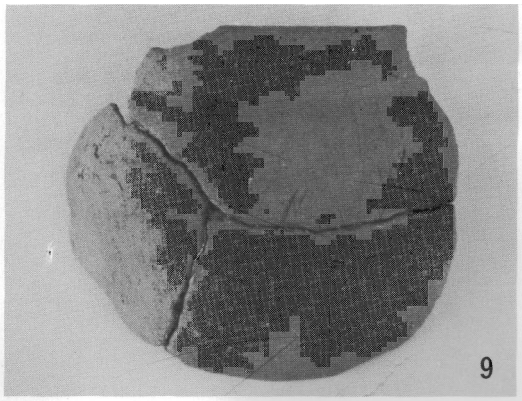

4

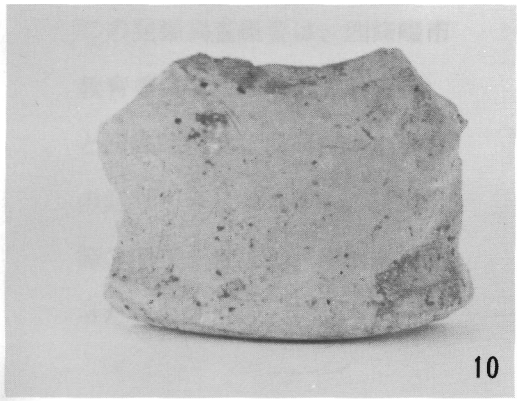

5

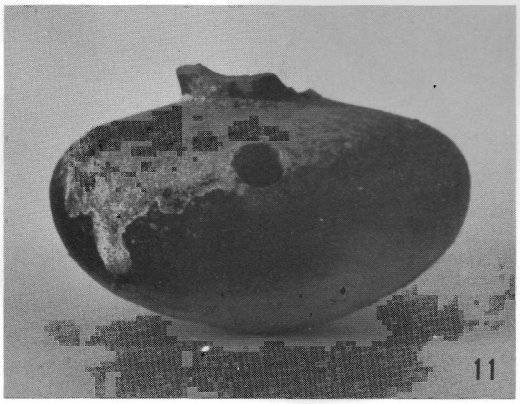

6

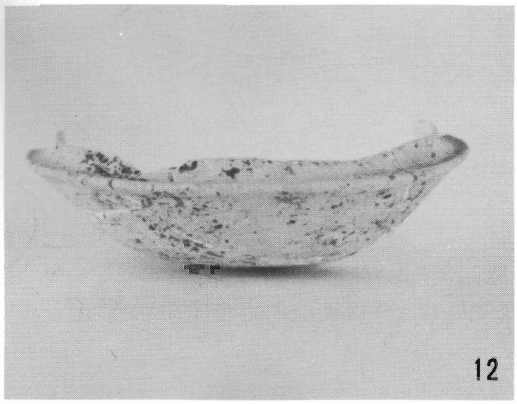
7

8


9

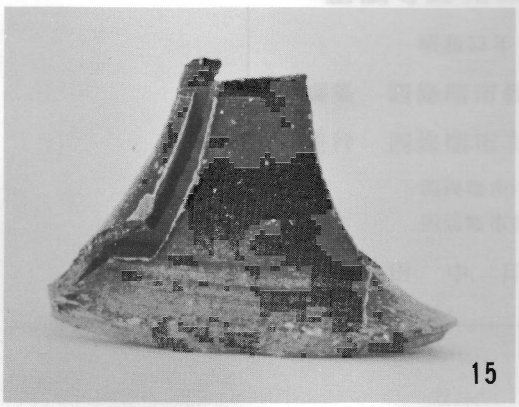

10

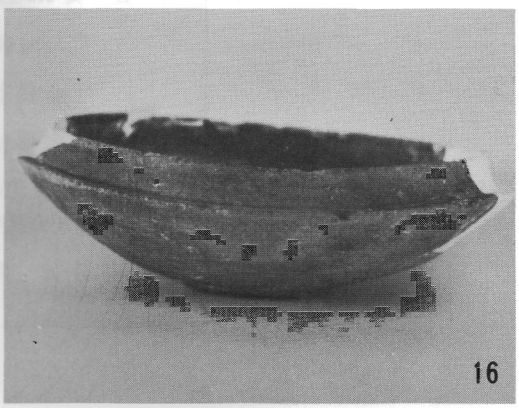

11


12

13

14


15


16

正法寺跡発掘調査概要・Ⅱ

昭和53年3月発行

編集　四條畷市教育委員会

発行　四條畷市教育委員会

四条畷市中野本町1－1

印刷　田中印刷 K·K